食糧増産に励む少年団　東村山郡楯山村国民学校

小学生の勤労作業一覧表

1945（昭和20）年の作業日数の内容

年度	出席すべき日	作業日数
昭和16	255	22
昭和17	260	23
昭和18	261	41
昭和19	261	51
昭和20	275	80

- 自家勤労…27日（4何年生以上）
- 蕨（わらび）採り…2日（全児童）
- 自家勤労…14日（3年生以上）―田植期間
- 自家勤労…15日（3年生以上）―養蚕期間
- 笹（ささ）の実（み）採り…5日（全児童または学年別）
- 自家勤労…5日（5～6年生）
- 蕗（ふき）とり…1 日（全児童）
- 松根油（しょうこんゆ）採取用薪（まき）運び…1日（全児童）
- 杉皮運び…1日（5～6年生）
- どんぐり拾い… 1日（全児童）
- その他… 山ぶどうの葉採取、落葉（おちば）集め、薪（まき）集め、落葉（おちば）拾いなど

10 戦争中のくらしを語るもの　昭　和

第二次世界大戦（太平洋戦争）が終わって、70 年近い月日が過ぎ、当時の生活を記憶している人も大変少なくなりました。

戦争中のくらしを語るものを通して、当時の生活を見つめてみましょう。

戦争と学校生活

昭和に入り日本は戦争へと進み、昭和16年には山形市の学校も「国民学校」となりました。

戦争で大人の男性が少なくなり、小学生も自分の家での勤労や、河原の草刈りや薪集めなど働くことが多くなりました。

学校での学習や生活も様変わりしてきました。まず、体育の学習では騎馬戦などの戦いの運動や、学芸会の劇では、「飛行機来る」など、戦争に関するものが多かったそうです。修学旅行も、遠くは行けず歩いての蔵王登山等になり、加えて、卒業アルバムも廃止になった学校もありました。

山形市立第四小学校では、明治45年の第１回卒業から約１世紀にわたり、卒業生が学習の足跡（存蹟（そんせき））として、絵や書などを書いて掛け軸にして残していますが、戦争中の「存蹟」には、学校生活が戦争に関わっていたことがわかります。また、少年兵の募集もあり、多くの少年が親の反対を振り切って志願しました。

家庭の生活も厳しくなり、お弁当を持ってこれなかった人もいました。

カズノホン　算数の教科書

決戦下の中学生・女学生

海軍志願兵募集ポスター

銃後少年双六

第四小学校の「存蹟」（昭和19年）

また、昭和17年２月から、衣料品が全国一斉に衣料切符による配給制となり、自由に買うこともできなくなりました。紙の不足も深刻で、印刷した紙の裏面使用や、封筒を裏返しして再使用も行われました。

戦争も終盤に入った昭和19年６月30日に、政府は学童集団疎開を実施し、山形市は東京都豊島区立長崎第二・第三国民学校児童618名と付き添い教員44名らを迎えました。市では、26の寺院に児童を割り振り、そこから市内の国民学校に通って学習しました。

疎開学童を引き受けた寺院では、住職夫人が寮長となり、町内会婦人部の協力で生活の世話にあたりました。

昭和20年８月15日、長かった戦争が終わり、日本も山形も、そして、学校も新しく生まれ変わっていきました。昭和22年４月１日、現在と同じ学校名となり、ほとんどの学校では、新しい時代の、新しい学校を目指す「校歌」も生まれました。

ミニ知識 16

青い目の人形

「青い目の人形」は、1927（昭和２）年２月、アメリカ各地の子どもたちから集められた人形12,000体余りが横浜に到着し、日本各地の小学校に届けられた物です。

山形県には 160 体が届けられ、学校では歓迎会を開き、礼法室に飾り、毎年の雛祭りには一緒に飾りました。

やがて、戦争でアメリカが敵になると、「青い目の人形は敵の回し者だ」ということになり、多くの小学校では火をつけて焼いたりしました。

しかし、そんな中でも青い目の人形を守った先生がいました。学校の中の暗い場所に隠したのです。その後、校舎が壊される時に、発見されたものもあります。

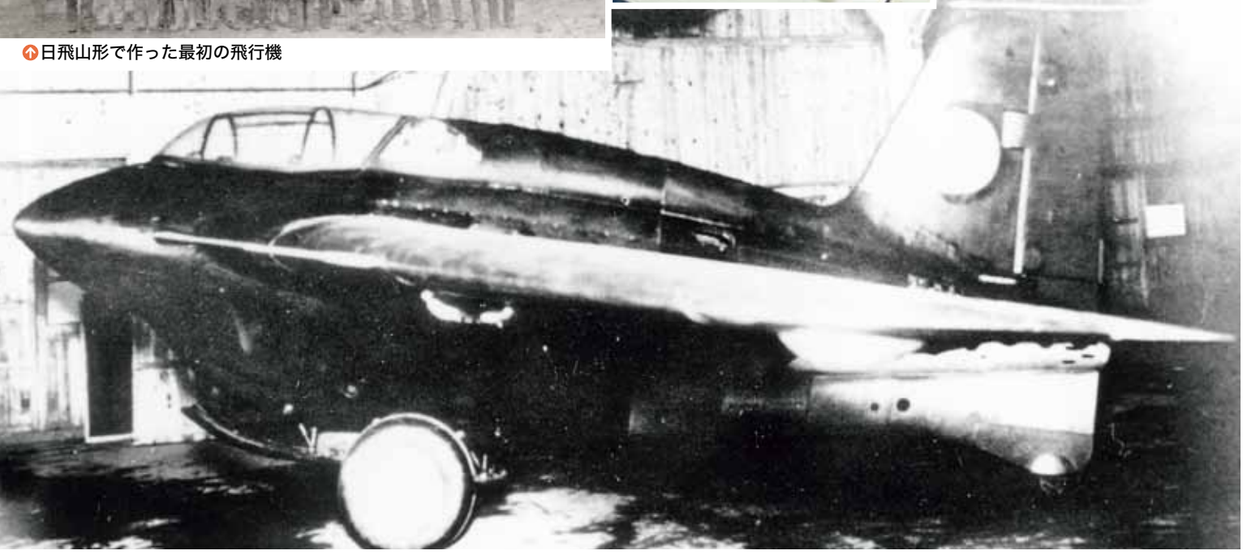
第一小学校

金井小学校

蔵王第一小学校

日飛山形で作った最初の飛行機

「秋水」の模型



山形製ロケット戦闘機「秋水」（昭和20年日飛山形製作所）

ミニ知識 17

爆撃されなかった山形市

山形市は戦争で爆撃を受けなかった数少ない県庁所在地です。しかし、当時は空襲に対する不安の毎日で、下の写真のように連日のように防空訓練が厳しく行われました。

昭和20年３月の東京大空襲後、７月９日にはＢ29による空爆で仙台が大被害を受けたことにより、山形市民も警報発令の下、防空服装のまま仮寝をする夜が続きました。

防火訓練

ロケット戦闘機「秋水（しゅうすい）」

上の写真は太平洋戦争中に山形で開発されたロケット戦闘機「秋水」で、昭和20年6月に完成した時のものです。

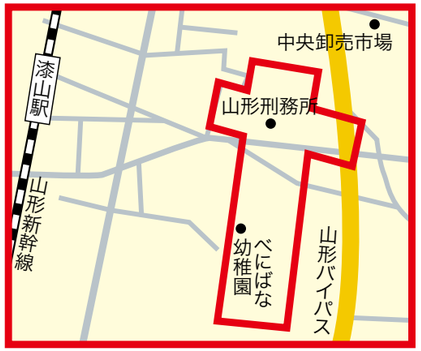
「秋水」は、太平洋戦争末期に日本軍が開発を目指したロケットエンジンを推力とする戦闘機です。独軍のメッサーシュミットMe163の資料を基に研究開発され、エンジンを三菱重工が、機体製作を、日本飛行機などが請け負いました。

全長5.95m、全幅9.5m、全高2.7m、自重1.5ｔ、時速約900㎞/hで、３～４分で高度10,000mに到達可能とされ、同高度から爆撃するアメリカ軍のB29に手を焼いていた日本軍にとって本土防衛の切り札でした。昭和20年６月に初号機が完成し、プロペラのない流線形の胴体に斜め後方に伸びる主翼が見事な戦闘機でした。1945年７月に試験飛行が行われましたが失敗し、未完成のまま終戦を迎えることになりました。終戦後、日本軍の技術を調査するために米軍は３機の秋水を取り上げました。そのうちの１機は山形でつくられたものでした。

戦後、日飛（にっぴ）工場で戦闘機の製造に関わった人たちは、県内各地に散らばり、山形のものづくり産業の礎を築いたと言われています。

日飛山形製作所工場配置図 –航空写真より再現–

①本部事務所
（1F職員食堂　2F第三課会計）
②食堂
③汽缶場、コンプレッサー室
（150HP 1台　100HP 1台）
④乾燥室
⑤木工場（製材）
⑥木工場（1F翼、2F現図室）
⑦重板金工場（胴体）
⑧総組立工場（K5Y1九三中線）
⑨利材課（2F）
⑩変電所33000V／3300V、1250K×3
⑪砂吹、調質、鍛造工場
⑫機械工事
⑬軽板金組立工場
⑭発送荷造場
⑮ドープ工場（J8M1秋水組立工場）
⑯材料倉庫
⑰実習場
⑱青年学校（研修所）
⑲日飛神社（宮町の両所宮に遷座）
⑳守衛所一本館
（1F医務、交換、放送　2F総務外）
㉑総組工場予定地（4500坪）



日飛（漆山）飛行場跡地

日飛神社社殿（現鳥海月山両所宮境内社日枝神社）

軍備工場の誘致と日飛山形製作所

JR北山形駅から北東に約700m進むと、鳥海月山両所宮の境内に１ｍほどの小さなほこらがたたずむ場所があります。「日枝神社」の名で親しまれる社は、かつて「日飛（ニッピ）神社」と呼ばれていました。

「ニッピ」とは、戦闘機メーカーだった「日本飛行機」のことで、戦前、この場所から約４㎞南にあった日飛山形製作所の敷地内にまつられていた神社です。戦後の工場閉鎖に伴い、山形市宮町３丁目の鳥海月山両所宮の境内に移されました。

戦争の進展とともに市内の工場は厳しい統制でほとんどが破滅に近い打撃を受け、多数の失業者を出すようになりました。市では、軍備工場の誘致運動も積極的に進め、昭和17年３月には、横浜に本社のある日本飛行機が鉄砲町に山形工場を完成し、海軍演習機の製造を開始しました。また、漆山にある山形刑務所の辺りには日飛（漆山）飛行場も整備されていました。日飛工場は、最盛期には従業員3,000人が働くという、山形市としては空前の規模の工場で、ほとんど地元の人が採用されていました。

太平洋戦争末期、幻のロケット戦闘機「秋水」はこの日飛工場で作られていました。

ミニ知識 18

不忘山に墜落したB29

昭和20年６月19日の山形新聞によると「捜査隊が、上山市萱平から約５里の当時宮城県刈田郡七ヶ宿村地内（七ヶ宿町）の蔵王連峰南端不忘山（1705m）八合目付近で森林地帯に散乱するB-29の機体と乗員11名の腐乱死体を確認した。」と報じています。

「山に囲まれた山形は、戦火に見舞われることはないだろう」と思っていた市民は、一転、空襲下の生活が現実のものと思い知らされた事故でした。

『不忘の碑』は B29 の搭乗員を慰霊するために建てられた石碑です。

B29 墜落現場「不忘の碑」